

私の大震災備忘録

井上 信彦（仙台市水道局給水部管路整備課長）（当時所属：管路整備課）

【震災当日】

3/11 担当していた布設工事の立会の帰り道、それはやってきた。最初の揺れは体感的に震度5弱くらいか…。「この程度なら大した濁りも発生しないな、余裕よゆう！」と思っていた矢先、ライトバンが転がるほどの揺れが襲ってきた。全く体感したことのない揺れであった。怖い。「これ以上強くならないでくれ…」と願うしかなかった。延々と揺れが続く感覚があり、鳥肌が立ったことを覚えている。車外では2階建てアパートの窓ガラスが全て飛び散っていくのが見えた。停電で信号機が消えているため、いつもなら15分で着く水道局まで1時間以上掛かってしまった。職場に戻ると、係長から「現場の安全確認に行って」との指示を受け、行ってきたばかりの現場に再度向かった。現場は、現場代理人の機転で掘削箇所を碎石で一旦埋め保全を図っていた。さすがベテラン代理人である。安全を確認した後、3時間かけて局に戻った。時間は21時、見上げればプラネタリウムのような満天の星であった。

【給水車に乗って】

3/13 台原森林公園での応急給水を担当するよう指示を受けた。応急給水拠点になっている箇所である。はるか名古屋市から応援に来て下さった給水車に同乗し現場へ向かった。公園が近くなると人の列が延々と続いており「こんな人数を給水車一台で回すのか…」と絶句した（のちのGIS計測で300m近く並んでいたことがわかった）。緊急貯水槽から立ち上げた応急給水栓と、給水車による応急給水とで給水に当たった。無心で給水に当たっていると間もなく給水車のタンクが空になってしまった。こんなに人が居るのに現場を離れなければならないのか…不安そうに並んでいる皆さんを見ると居ても立ってもおられず、自然と「給水車が空になりました、浄水場まで汲みに戻ります！1時間半で戻ってきます！」と列に向かって叫んで歩いていた。結局、渋滞で3時間以上もかかってしまい強い無念さを感じた。この日の夕方、初めて本部へ足を踏み入れた。テレビ画面には濁流に飲まれる車や建物が延々と流れていた。これが仙台空港付近の映像であると気が付いた時、初めて事の重大さを知った。車のラジオだけが情報源である。「100~200人の行方不明者が…」と流れており尋常ではない事だけは感じていた。これほどの水が襲ってくるとは想像もしていなかった。衝撃であった。

【高速道路にて】

3/16 その日の充水洗管作業が終了し、真っ暗な中帰路についた。高速道路は緊急車両のみ通行

可能となっていた。泉PAに併設されているゲートから乗り入れ南下する。本線に合流したとたん、真っ暗な道路に真っ赤に光る線が飛び込んできた。その真っ赤に光る線は、全く途切れることなく仙台南インターへ出る約16kmもの間、延々と続いていた。その光る線の主は、北へ向かう緊急車両のパトライトであった。日本中の緊急車両が北を目指して進んでいる、そう感じた。『大変な困難ですが東北を宜しくお願いします。』動画を残しておけば良かったと悔やまれる出来事であった。

【住民の声】

3/18 地震から1週間が経ち、昼夜問わずの幹線立上げ作業で気持ち的にもだいぶ疲弊していた。この日は虹の丘配水所からの配水が可能となったため、支管の充水洗管作業を行っていた。夕暮れでもあり、ポーッと排水している水を眺めながら「今日も何時に終わるものか…」と考えていた。ふと気が付くと庭先からおじいさんがこちらを見ていた。軽く会釈をすると道路まで出てきてくれた。「疲れているだろう。頑張ってくれてありがとう。世界一の震災に立ち向かっているのだから、あんたらは世界一の技術屋だ」と言葉を掛けて頂いた。思いがけない感謝の言葉であった。ありがとうございますとしか返せなかったが、心から嬉しかった。水道局で現場作業に当たることが出来て本当に良かったと思えた瞬間であった。もう一度お会いして、今でもあの時の気持ちを忘れず頑張っていますと伝えたい。

【東松島市でのホースの話】

4/11 本市第1陣の応急給水隊として東松島市へ派遣され、給水先の福祉施設で受水槽に加圧給水を行っていた。最初は夢中であったため気付かなかったが、目の前に体育館があり入口はブルーシートで囲われていた。ホースを持ちながら何気なく見ていると、一台の車がやってきて数人が中へ入っていった。程なくして、皆泣きながら出てくる。それは遺体安置所であった。その景色に胸が締め付けられ「自分も一刻も早く水を配らねば」と、給水が終わったホースを地面に置きズルズルと巻き始めた。その瞬間「そんな巻き方はダメだ！」と同僚から一喝された。我々は命の水を配っているのである。汚れたホースで配ったのでは受け取る方はどう思う？災害時でも、当たり前のことを平時と同じようにやる。焦って気合だけが空回りしていた自分を戒めて頂いた。この百戦錬磨の年下の同僚を、今でも先生と崇めている。